

(様式3号)

学位論文の要旨

氏名 河郷 亮

〔題名〕

Correlations between Obesity and Metabolic Syndrome-Related Factors and Cecal Intubation Time during Colonoscopy. (大腸内視鏡検査における盲腸到達時間と肥満・メタボリックシンドローム関連因子との関係)

〔要旨〕

【背景】大腸内視鏡検査(以下CS)下の大腸ポリープ摘除により大腸癌の発生と癌死の抑制効果は既に証明されており、CSに習熟した医師の育成が重要な課題として挙げられる。CSにおいて盲腸到達時間を短縮することは患者の苦痛軽減や十分な観察時間の確保も可能となるが被験者側の要因が大きく、CSを習練中の医師が難易度の高い症例を担当するのは大腸内視鏡検診の精度管理上避けるのが望ましい。そこで今回、我々はCSにおける盲腸到達時間を指標として、CSを習練中の内視鏡医が担当すべき症例の特徴に関して、メタボリックシンドローム関連因子を含めた複数の項目の因子を用いて後ろ向きに検討を行った。【方法】2011年4月から2014年12月までに当院でCSを施行された症例のうち、初診の患者を対象とし、大腸切除歴、盲腸到達不能症例や緊急内視鏡症例を除外した。その中で病歴聴取等に同意が得られ、身体関連因子等のデータの欠損のない症例813例について検討した。検討項目として、性別、年齢、BMI、腹囲、高血圧の有無、糖尿病の有無、高脂血症の有無、腹部手術歴(大腸切除術以外)の有無、大腸憩室症の有無、抗血栓薬の内服の有無、腸管洗浄度を用いた。熟練医の定義は内視鏡施行歴9年以上の実績を持つ医師とし、それ以外の医師を習練医と定義した。習練医が担当すべき症例として、習練医が途中交代を要せずに15分以内に盲腸への挿入が可能である症例を適格症例として定義し、それ以外を非適格症例とし、後ろ向きに検討した。【結果】全体の検討では、男性、熟練医の先発した症例、途中交代が必要でなかった症例、腸管洗浄度の良好な症例で盲腸到達時間の有意な短縮を認めた。また、習練医が担当した症例は562例であり、適格症例群は194例、非適格症例群は368例であった。両群を比較すると男性($P=0.017$)、年齢が若い症例($P=0.033$)、BMIの大きい症例($P=0.034$)、高血圧罹患症例($P=0.001$)、腸管洗浄度が良好な症例($P=0.001$)で有意に適格症例が多いという結果であった。性別で分けて検討を行うと、男性では年齢が若い症例($P=0.009$)、腸管洗浄度が良好な症例($P=0.008$)で有意に適格症例が多く、女性では高血圧罹患症例($P=0.004$)で有意に適格症例が多かった。【結論】CSを習練中の医師への症例選択は、性別、年齢、BMI、高血圧罹病の有無、腸管洗浄度を考慮して決定することが有用であると考えられた。

学位論文審査の結果の要旨

医学系研究科応用分子生命科学系 (医学系)

報告番号	甲 第 1482 号	氏 名	河 郷 亮
論文審査担当者	主査教授	山崎 隆弘	
	副査教授	永野 浩明	
	副査教授	坂井 の 功	
学位論文題目名 (題目名が英文の場合は、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。) Correlations between Obesity and Metabolic Syndrome-Related Factors and Cecal Intubation Time during Colonoscopy (大腸内視鏡検査における盲腸到達時間と肥満・メタボリックシンドローム関連因子との関係)			
学位論文の関連論文題目名 (題目名が英文の場合は、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。) Correlations between Obesity and Metabolic Syndrome-Related Factors and Cecal Intubation Time during Colonoscopy (大腸内視鏡検査における盲腸到達時間と肥満・メタボリックシンドローム関連因子との関係) 掲載雑誌名 Clinical and Experimental Gastroenterology 5 January 2017 Volume 2017:10 Pages 1-7			
(論文審査の要旨) 【背景】大腸内視鏡検査(CS)において盲腸到達時間を短縮することは患者の苦痛軽減や十分な観察時間の確保も可能となるため、CSに習熟した医師の育成が重要な課題となっている。今回CSにおける盲腸到達時間を指標として、CSを習練中の内視鏡医が担当すべき症例の特徴に関して、メタボリックシンドローム関連因子を含めた複数の項目の因子を用いて後ろ向きに検討を行った。【方法】2011年4月から2014年12月までに当院でCSを施行された症例のうち、初診の患者を対象とし、大腸切除歴、盲腸到達不能症例や緊急内視鏡症例を除外した。その中で病身体関連因子等のデータの欠損のない症例813例について検討した。検討項目として、性別、年齢、BMI、腹囲、高血圧、糖尿病、高脂血症、腹部手術歴(大腸切除術以外)、大腸憩室症、抗血栓薬内服、腸管洗浄度を用いた。熟練医の定義は内視鏡施行歴9年以上の実績を持つ医師としそれ以外の医師を習練医と定義した。習練医が担当すべき症例として、習練医が途中交代を要せずに15分以内に盲腸への挿入が可能である症例を適格症例として定義し、それ以外を非適格症例とし後ろ向きに検討した。【結果】全体の検討では、男性、熟練医の先発した症例、途中交代が必要でなかった症例、腸管洗浄度の良好な症例で盲腸到達時間の有意な短縮を認めた。また、習練医が担当した症例は562例であり、適格症例群は194例、非適格症例群は368例であった。両群を比較すると男性(P=0.017)、年齢が若い症例(P=0.033)、BMIの大きい症例(P=0.034)、高血圧罹患症例(P=0.001)、腸管洗浄度が良好な症例(P=0.001)で有意に適格症例が多いという結果であった。性別で分けて検討を行うと、男性では年齢が若い症例(P=0.009)、腸管洗浄度が良好な症例(P=0.008)で有意に適格症例が多く、女性では高血圧罹患症例(P=0.004)で有意に適格症例が多かった。【結論】CSを習練中の医師への症例選択は、性別、年齢、BMI、高血圧罹病の有無、腸管洗浄度を考慮して決定することが有用であると考えられた。			
本研究は、大腸内視鏡における盲腸到達時間とメタボリックシンドロームの関連因子である高血圧、糖尿病、高脂血症を含めて検討を行った初めての報告であり、習練医が担当すべき症例を考慮するうえで非常に有用な知見をもたらしたと考えられる論文である。よって、学位論文として価値あるものであると認められた。			

備考 審査の要旨は800字以内とすること。